

しゅんぶう／春の日に吹く穏やかな風。まだまだ寒気が厳しい立春を過ぎると、日脚もだいたい伸びて、日によってはうらうらと太陽が照り、思いのほか暖かくなることもある。

らししく、 粹なくらし

CLOSE UP

被爆80年 ヒロシマの記憶 若い世代が 伝える戦争と平和

CLOSE UP 01



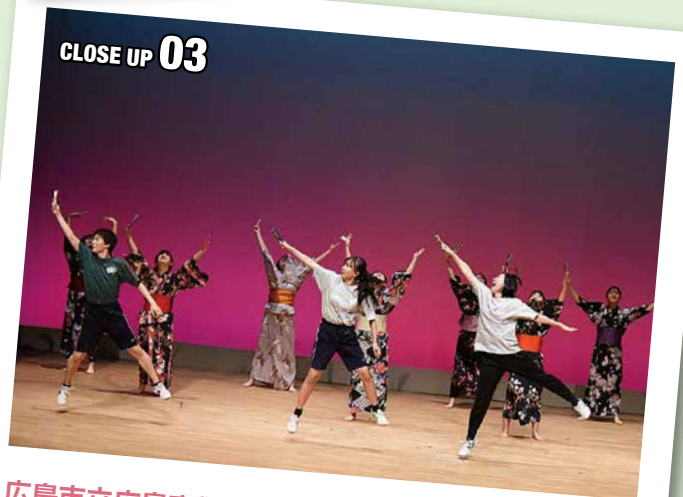
学校法人崇徳学園 崇徳高等学校 新聞部
歴史ある高校新聞部、高校生の視点で
ヒロシマの記憶、広島は今を取材し、継承する

CLOSE UP 02



比治山大学・比治山大学短期大学部／エリザベト音楽大学
国宝不動院から平和への祈りを届ける
不動院プロジェクションマッピング
一光でつなぐ歴史とみらいー

CLOSE UP 03



広島市立広島商業高等学校 演劇部
母校を題材とした創作劇「ねがいはしては」に
込める平和への願い

連載

- ▶らししくコラム 国境を越えたヒロシマの記憶と連帯：在韓被爆者と日本の市民社会
- ▶ようこそ！公民館へ～南区内公民館へ ▶人材バンク 名人 宝人 達人
- ▶Hmi助成支援団体のご紹介 ▶情報の森 ▶プラザ通信



歴史ある高校新聞部、高校生の視点でヒロシマの記憶、広島を取材し、継承する

編集作業の様子


被爆80年 ヒロシマの記憶 若い世代が伝える戦争と平和

CLOSE UP

被爆80年を過ぎ、日本では戦争を経験した人が減少してきています。これからの平和のためには、過去の悲惨な戦争を忘れることはできません。今後の継承が課題となっている今、若い世代が担うさまざまな活動を紹介します。

学校法人崇徳学園 崇徳高等学校 新聞部

<https://www.sotoku.ed.jp/>



創部77年の伝統あるクラブが1年かけて取り組んだ「被爆80年特集号」

崇徳高校新聞部は、昭和24年に創部し77年の歴史を誇り、全国コンクールで幾度も受賞するなど、全国トップクラスの実力が知られています。

「部員は現在、全国でも最多規模の187人が所属。普段は、取材をして記事を書く班、写真を撮る班など複数のグループに分か



▲ 呉市での取材 (令和7年4月)

れて、校内の運動部、文化部の部活動や学校行事など、1年を通して追いかけています。新聞発行は、各クラスに貼り出す速報版を年間

200回近く、本紙は年に3回、A3版複数ページを全校生徒に配布しています。また、大きなイベントがあった時には特集号を発行しており、今回の、被爆80年特集号は、3年生の集大成ともいえる力の入れ方でした」と顧問で副教頭の吉松朋之先生。

令和7年8月に発行した「被爆80年特集号」はA3判16ページにもおよび、高校のみならず併設する中学校を含む、全校生徒約1,400人に配布しました。

作成の中心となった3年生は、1年前から準備を進め「過去・現在・未来 記録の継承、記憶の継承」とテーマを決定し、部員たちで意見を出し合い、企画内容、取材候補者を練り、実際に取材・撮影に臨みました。

取材しなければわからない事がある 新たな考えや、多くの学びにつながる

企画のひとつが、被爆者で当時8歳だった村上啓子さん（現在は茨城県牛久市在住）が、今の中区白鳥九軒町で被爆後に、裸



▲ 村上さんの足跡を実際に裸足で歩く追体験 (令和7年4月)

足で約40kmの道のりを歩き、山県郡千代田町の親戚の元へ避難した足跡を、生徒たちが実際に裸足で歩いて追体験することでした。この企画を考え、実際に歩いた齊藤ひかりさんは「ただ話を聞くだけでは理解できない部分も、自分で歩くことでその大変さが分かったし、何より平和な日常のありがたみを感じました」と話します。

また、現在、南区比治山に施設が置かれている放射線影響研究所が、戦後すぐから取り組んできた研究の意味、そしてその成果がどう活用されているのかも取材しました。「原爆の実相を、被爆体験を通して後世に伝える方法とは別に、被爆者や被爆二世からのデータを、現在に役立てている放射線影響研究所。例えば、昭和61年に起きた「チェルノブイリ原発事故」後、それまでに収集した被爆者のデータを、現地のこどもたちの治療に活用するなどの取り組みがあることを、取材するまで知りませんでした。私たちは、研究結果を一方的に享受するのではなく、自らが興味を持つ姿勢も今後は大切になるのでは、と感じました」と、取材を担当した洲濱侑さんは話します。




こういった新聞部の活動は、学園内のみならず、地元の新聞社に記事として取り上げられたり、テレビの全国ニュースでも紹介され、視聴者から新聞を求める連絡が複数寄せられたそうです。

「3年間の部活動を通じて、忍耐力を学びました。僕は直ぐに結果や答えを求める世代と言われていて。でも、新聞作成は、企画立てから取材者の選定、そして実際に取材し、原稿書きまで、完成するまで多くの工程があります。しかし、そのどれも疎かにできない。被爆者に取材をする時も失礼の無いよう、真剣に質問し、答えを聞く。部活を続けていると、時には辛い時もあつたけど、きちんと取り組むと、自ずと結果が出ました。その喜びは、何事にも変えることができません」と大西翔陽さん。また自分の将来の進みたい目標が見つかったと言うのは久米叶恵さん。「中学生の時は、将来の仕事について漠然とした夢しかなかったけど、新聞部での活動を通して、被爆の記憶と継承すべき内容を伝えるためには何が必要なのか、取材し考える中で、今の自分に欠けているものを含め、見つけることができました」と話します。

今、被爆者から直接話を聞く事ができる、最後の世代かもしれない広島の高校生が繋ぐ、被爆80年の記録と継承。今後90年、100年の節目も、若い世代の平和への思いが、世界に届く事を強く願います。

特集

01 被爆80年 ヒロシマの記憶 若い世代が伝える戦争と平和

- ▶ 学校法人崇徳学園 崇徳高等学校 新聞部
-  被爆建物の取材 (令和7年4月)
- ▶ 比治山大学・比治山大学短期大学部/エリザベ音楽大学
-  プロジェクションマッピングの様子
- ▶ 広島市立広島商業高等学校 演劇部
-  「ねがいはまては」上演の様子

05 らしっくコラム

- ▶ 国境を越えたヒロシマの記憶と連帯：在韓被爆者と日本の市民社会 広島女学院大学 人文学部 国際英語学科 准教授 ドゥロー・アーゴタ (Duro Ágota)

06 ようこそ!公民館へ

- ▶ 南区内公民館

07 人材バンク 名人 宝人 達人

- ▶ 安達 克之さん
- ▶ 延藤 靖さん

09 Hm助成支援団体のご紹介

- ▶ 三篠二丁目楽団
- ▶ みささ日本語交流ひろば にじいろ

11 情報の森

15 プラザ通信

国宝不動院から平和への祈りを届ける 不動院プロジェクションマッピング —光でつなぐ歴史とみらい—

比治山大学・比治山大学短期大学部

https://www.hijiyama-u.ac.jp



エリザベト音楽大学

https://www.eum.ac.jp/



室町時代に建立され奇跡的に戦災を免れた 国宝不動院に映し出された平和の希望と光

令和7年11月1日・2日の2日間、東区牛田新町にある国宝不動院金堂で、光と音が織りなす幻想的なプロジェクションマッピングが行われました。



令和6年、比治山大学短期大学部美術科の学生たちの「世界に通用するメディアアートを作りたい」との思いからプロジェクトは始まりました。「私は過去にプロジェクションマッピングに取り組んだ経験



▲ プロジェクションマッピングの様子

がありましたが、学生たちは未経験。作品を創る上での大変さを通して、制作の過程そのものを実践型の学びの場として考えました」と比治山大学・比治山大学短期大学部生涯学習・地域連携センター長を務める宮崎しずか教授。

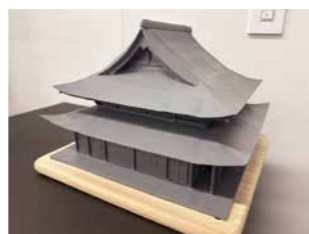
プロジェクトは、比治山大学短期大学部美術科の学生が映像を、エリザベト音楽大学の学生が音楽を担当し、近隣の高校生も参加する共創プロジェクトとして展開。そして、被爆80年という節目に、比治山大学短期大学部附属幼稚園園児、地域の子どもたちも平和への祈りを込めたぬり絵のアートを制作。原爆の惨禍を耐えて現存する、国宝不動院金堂に投影されました。

改めて感じる平和の大切さ 学生たちの大きな実践型の学びの機会に

令和7年4月には、このプロジェクトに関わる比治山大学短期大学部とエリザベト音楽大学の学生が一同に集まって、不動院の副住職から不動院の歴史、戦時中のお寺の様子や当時の役割について、金堂で講義を受けました。「原爆投下直後、救護所としての役割も果たした不動院。その後80年、平和な時代を積み重ねてきたからこそ、今回のようなプロジェクションマッピングにも挑戦できた。改めて平和の大切さをかみしめました」と宮崎教授は語ります。

プロジェクトは、映像をどう投影すれば綺麗に見えるのかを確認するために、まずは、舞台となる不動院金堂の3Dモデルを製作。

「不動院金堂の屋根のカーブの傾斜角、外から見える垂木の本数などを数えるため何度も不動院に通ううち、次第に愛着もわきました」と初めて3Dモデルに携わった室井梓沙さんは振り返ります。その後は、本番と同じようにプロジェクションマッピングを投影するテストを行うなど準備を進めました。「春の段階では不安の方が大きく、このままでは出来ない、いや絶対にやらないといけなくて、という状態から、夏頃には、学生の変化を感じ、制作の進捗具合がグッと伸びました。関わる外部の人との接触が増え、責任感が生まれたと同時に、制作スキルの向上も見られましたね」と宮崎教授。



▲ 3Dモデルで製作した不動院金堂

こうして、多くの課題を乗り越えながら取り組んだプロジェクトは、比治山大学短期大学部美術科の学生による映像作品16本に、エリザベト音楽大学の学生が制作した音楽が重なり、さらにインスレーション作品も加わって、寺院とアートが織りなす幻想的な夜を多くの人が鑑賞に訪れました。

「平和な日本、そして不動院という特別な場所で、被爆80年の節目だからこそできたプロジェクトでした。参加した学生も、改めて平和を意識した一年になったと思います」と話す宮崎教授。

メディアアートを通して平和を伝える、今回のプロジェクトで、実践型の学びを通して制作スキルが向上しただけではなく、平和を深く考える時間にもなった学生たち。この経験は学生にとっては大きな財産になり、プロジェクションマッピングを見た人には、学生たちの、平和への祈りを感じる貴重な機会となったようです。



▲ 不動院金堂内で、副住職から講義を受ける学生たち

母校を題材とした創作劇「ねがいましては」に込める 平和への願い

広島市立広島商業高等学校 演劇部

戦争によって学びや自由が奪われた ひたむきに生き抜いた先人たちへの思い

昭和19年、戦時下の国策で広島市立広島造船工業学校に改変された広島市立広島商業高等学校。昭和22年3月に廃止されるまでの3年間、生徒たちは製図や武器の製造、さらには市内の建物疎開に動員され、原爆では195人もの生徒が犠牲となりました。

平成29年に同校に赴任した演劇部顧問の黒瀬貴之先生は、この歴史を知り、学校創立100周年の節目にあたる令和3年に「ねがいましては」を創作、上演しました。そしてこの創作劇は「令和3年第45回全国高等学校総合文化祭」で文化庁長官賞を受賞しました。

「令和2年、コロナ禍で脚本を書き始め、完成を生徒たちに報告したときには悲鳴にも似た歓声が上がった。その姿を見たときに、青春をコロナに奪われ苦しんでいたんだ、と改めて感じた。同時にヒロシマを表現する興奮のようなものもあった」と当時を振り返ります。

「ねがいましては」に込めた思いと 受け継がれていく歴史

「ねがいましては」というタイトルはすぐに決まった。これしかなかった。商業高校らしく珠算で使われる言葉、戦時中、そして今の生徒たちの願いに思いをはせた」と力強く話す黒瀬先生。演劇指導では脚本やセリフに込めた思い、当事者への取材で感じたことを生徒たちに伝え、稽古しています。

同作は、コロナ禍に翻弄され不自由を余儀なくされた生徒たちが、戦時中に自由を奪われ歴史の波に飲み込まれそうになりなが



▲ 「ねがいましては」上演の様子



▲ 令和3年第45回全国高等学校総合文化祭（和歌山県）

らも必死で生き抜いた先人たちの姿を描こうとするストーリー。「演劇したい!」と締めくくる最後のシーンは、見る者すべてがコロナ禍の自分と重なり、大きな反響を呼びました。

「被爆80年を過ぎ、経験者もいずれいなくなる。この悲惨な事実がなかったことにならないよう、伝えていかなくてはいけない。とはいえ、ネガティブなことだけじゃない。先人たちの明るい姿も演劇で表現していけたら」と黒瀬先生。

同校は、演劇を通して戦争の悲惨さや平和の大切さについて考える機会とするため「ねがいましては」を代々の演劇部員によって受け継ぎ、毎年夏に上演しています。2年生の角井絢由美さんは「原爆の悲惨さを知り、市商の歴史も知った。次の世代に繋げるためにも精一杯努めたい」と話します。

ほかにも平和への思いを込めた作品「風の電車」を令和5年に創作。戦地に赴いた職員に代わり、路面電車の運行を担った女学生の、実話に基づいた物語です。また令和8年3月には「第14回ふくやま高校生春の演劇フェスティバル」に招致されるなど同校の演劇部は注目されています。

演劇を通して、生徒たちが表現する母校の歴史と平和への思いが、一人でも多くの人の心に届くことを願います。

※令和8年の「ねがいましては」は8月10日前後に同校の講堂にて上演予定

